

演目 『鉢木 薪の段』-独吟

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1		捨人のための鉢の木	お僧の為に盆栽を	鉢木とは盆栽の事。
2		切るとてもよしや惜しからじと	切る事は何も惜しくはありません。	(②【シテの人物像】)
3		雪打ち拂ひて見れば面白やいかにせん	こうして盆栽に積もる雪を拂って見ると... なかなか面白いものだ。さてどれから切ろうか。	
4		先づ冬木より咲き初むる	まずは、冬枯れの中、花の中で最初に咲く梅	
5		窓の梅の北面ハ	北側の窓の梅は	
6		雪封じて寒きにも	雪に閉じ込められ寒さで咲き遅れるというが	
7		異木よりまづさきだてば	それでも他の木よりは先に咲く	
8		梅を切りやそむべき	まずは先立つものとして最初に切ろう。	
9		見じといふ人こそ憂けれ山里の	山里の梅は卑しいので見ない、という人は 無風流だと思った。	
10		折りかけ垣の梅をだに	梅の枝で作った折懸垣の梅でさへ	折懸垣：木や竹等を折り曲げて作った垣
11		情なしと惜しみに	無情な事をするを惜しんだ	
12		今更薪になすべしとかねて思ひきや	まさか自分がその梅を薪にするとは思 いもよらなかった。	
13		桜を見れば春毎に	桜を見ると、春が来るたび、	
14		花すこし遅ければ	少しでも花が咲くのが遅れると、	
15		この木や侘ぶると心を盡くしそだてしに	この木に何か障りがあるのではないかと 心配して、丹精込めて育ててきたが	
16		今ハ我のみ悴びてすむ	今は落ちぶれてしまって、	
17		家桜切りくべてひざくらになすぞかなしき	この桜を切って火にしてしまうとは、 本当に悲しい事だ。	
18		さて松ハさしもげに	それから松。	
19		枝をため葉をすかして	曲がった枝を真直ぐにしたり、葉をすかしたり	枝をためるとは曲がった枝を真直ぐにする事。葉をすかすとは剪定する事。
20		かかりあれと	風情があるようにと心を配って	
21		植ゑおきし	植え置いていたが	
22		そのかひ今ハあらし吹く	今はその甲斐もなくなってしまった	
23		松ハもとより常盤にて	松は煙に縁があり	松は脂があり燃えやすい材木。 (④【かざし文句】)
24		薪となるは梅桜切りくべて今ぞ御垣守	梅桜と共に薪にするのも当然でしょう	
25		衛士の焚く火ハおためなり	さあ、この火はあなたの為に焚くのです。	
26		よく寄りてあたり給へや	十分によくおあたり下さい。	

① 【鉢木の物語】

鎌倉時代中期、

上野国佐野（現在の群馬県佐野）に

佐野源左衛門尉常世は妻と暮らしていました。

常世は一族に領地を横領され、すっかり

落ちぶれてしまっていたが、
武士としての心は忘れずに
もし鎌倉に一大事があれば
すぐに駆け参じる心持で日々過ごしていました。
ある大雪の日。あまりの大雪に困っていた
修行僧に宿を貸す事になりました。
夜が更けて行くにつれて寒さは増すので
常世は大事にしていた梅、桜、松の盆栽を切り
僧に暖をとらせるため焚火にしました。
二人は打ち解け夜通し話をします。
そして僧は常世の武士としての覚悟を聞き、
一晩明かし、この家を立ち去ります。
実はこの僧、諸国を旅していた
鎌倉幕府五代執権、北条時頼だったのです。
時頼は鎌倉に帰ると諸国の武士に
鎌倉に参集するようにと命を出します。
常世はみすぼらしいながらも
武士としての心を忘れず馳せ参じます。
時頼は常世の忠節を感じ、横領された領地を
常世に返し与え、更に焚火にした
梅、松、桜の盆栽に名で縁のある、
加賀の梅田、越中の桜井、上野の松井田を
合せて与えます。
常世は悦び勇んで郷里へと帰るのです。

② 【シテの人物像】

シテの佐野常世は僧のために大事にしていた
盆栽を焚火にして暖を取らせました。
鎌倉時代には当然、暖房機器など
ありませんから、客人に暖をとらせることが
おもてなしにつながります。謡を読めば
わかりますが、常世は草木を愛でる風流人。
零落しても手放さなかった大事な盆栽を
焚火にするなんて心が痛むのは当たり前です。
それよりも、目の前にいる僧をもてなす事を
優先させました。心優しい人物です。

この常世の行動は儒教の五徳の考え方、

仁（人を思いやること。）

義（利欲にとらわれず、なすべき事をする事。）

礼（「仁」を具体的な行動に表すこと。）

智（道理をよく知り得る、知識豊富な人。）

信（友情に厚く、誠実であること。）

を表したようです。貧しくても

武士として気高く、真心も忘れない

人として取るべき行動をできる人格者は

なかなかいないと思います。

だからこそ時頼は鎌倉に帰ってからの行動に

でたのでしょう。

この展開は、人に親切にすれば廻り廻って

自分のためになる。という意味の諺

「情けは人の為ならず」の例の一つでも

あります。

③ 【薪の段】

段というのは舞や節使いが秀逸な部分の事。

薪についての段なので「薪の段」といいます。

舞はありませんが、謡の節使いは難しく

聞き応えがあり、謡の詞章も大変面白いです。

④ 【かざし文句】

謡の文句の中に忌みはばかられるものが

ある時、別の文句にして謡う事。

もとは「松はもとより〈煙〉にて」

でしたが、徳川氏の別称・松平をはばかり

「松はもとより〈常盤〉にて」とかえて

謡うようになりました。

〈松〉は燃やして煙にするのに

適している、と謡って

謀反ととらえられてしまったら大変です。

⑤ 【冬の能】

能『鉢木』は真冬の大雪が降る日のお話。

シテが最初に言う詞、「ああふったる雪かな」

雪深い情景が目には浮かびます。

「薪の段」においても盆栽の上に

雪が積っている描写があります。

実際の能では雪の積もった鉢木の作り物

を舞台上に出します。

能『鉢木』はまさに「雪の能」です。